

みなみおおほらいせき 南大原遺跡 現地公開資料

1 調査の概要

遺跡名：南大原遺跡（みなみおおほらいせき）〔中野市遺跡番号 196〕

調査場所：中野市（旧豊田村）^{かみいまいみなみおおほら}上今井南大原

調査原因：長野県北信建設事務所による県道三水中野線建設工事

調査期間：平成 25 年 7 月 29 日～10 月 31 日（予定）

調査面積：1,047 m²

出土遺構：弥生時代一^{たてあなじゅうきよあと}竪穴住居跡、^{れきしょうもつかんぼ}礫床木棺墓、^{どころぼ}土壇墓、^{みぞあと}溝跡、^{たてあなじょうい}竪穴状遺構、^{こうどころ}土坑ほか

出土遺物：縄文土器、弥生土器（^{くりばやしき}栗林式土器一壺、^{つぼ}甕、^{かめ}台付甕ほか）
石器（^{せきぞく}石鏃、^{ませいせきぞく}磨製石鏃、^{ふとがたはまぐりばせきふ}太型蛤刃石斧、^{じんき}刃器、^{といし}砥石、^{まがたま}勾玉ほか）
鉄器（^{てつぞく}鉄鏃）

2 遺跡の位置と地形

南大原遺跡は、千曲川が大きく^{だこう}蛇行しながら流れる長野盆地の北端、旧千曲川左岸に^{ちゅうせきち}発達した沖積地上に立地し、旧千曲川の^{きょくりゅうぶ}曲流部、^{ぜつじょう}舌状地形の先端近くの場所に位置しています。

周辺の遺跡との関連をみると、千曲川を飯山市近くまで下っていくと 2007(平成 19)年に^{どうか}銅戈、^{どうたく}銅鐸の発見された^{やなぎさわ}柳沢遺跡（中野市柳沢）があり、旧千曲川の対岸には県史跡として著名な^{くりばやし}栗林遺跡（中野市栗林）が所在しています。ほぼ同時期の弥生人たちが生活した痕跡が残されており、当時の人たちが千曲川を介して^{かい}交流していたことが想像されます。

3 調査の成果

○弥生時代中期後半のムラ（いまから約 2,000 年前）

^{ひょうど}表土下 30～40 cm に広がる黒色の弥生時代の^{いぶつほうがんそう}遺物包含層をとりぞくと、その下層から、いまから約 2,000 年前と考えられる弥生時代中期後半のムラが姿をあらわしました。

○弥生人の住まい（^{たてあなじゅうきよあと}竪穴住居跡 SB）

今年度の調査で、竪穴住居跡が北側の調査区で2軒、南側で4軒みつかっています。昭和からの調査を合計すると、南大原遺跡全体で計13軒になります。今回お見せしている住居跡(SB14)は、直径6m円形で、柱が丸く並び、固くしまった^{はりゆか}貼床を持ち、壁際に^{しゅうこう}周溝が巡ります。この大きな家には、大家族が住んだのでしょうか。



竪穴住居跡(SB14)の遺物出土状況（南から）

○弥生人のお墓（^{れきしょうもつかんぼ}礫床木棺墓 SM）

南側調査区の北西端に、2～5cm大の礫を約130×50cmの長方形に敷き詰め、その上に遺体を^{ほうむ}葬ったと考えられる「礫床木棺墓」が2基(SM01、02)並んで出土しています。礫の周囲に板をはめ込んで、お棺にしたと考えられています。骨等は掘っている時にはわかりませんでした。今後掘った土をフルイにかけて^{ふくそうひん}装飾品などの副葬品も合わせて探していきます。



礫床木棺墓(SM01)の検出状況（南東から）

○まとめ

南大原遺跡の発掘調査は今年度で終了します。今回、昨年度までに明らかになってきていた、いまから約2,000年前の弥生時代中期後半のムラが、さらに東側に大きく広がっていくことがわかりました。旧千曲川対岸に位置する同時期の栗林遺跡と同等、またはそれ以上の規模のムラ(集落)が存在した可能性がでてきました。今後、遺跡の内容をさらに吟味し、隣接する栗林遺跡との関係だけでなく、千曲川流域に数多く所在する同時期の遺跡のなかで、南大原遺跡がどんな位置づけになるのかを考えていくことが必要となってくるでしょう。

南大原遺跡 現地公開資料

(一財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

電話：026-293-5926 FAX:026-293-8157

現場携帯(問い合わせ先) :090-4522-9979

2013.10.17 発行